

アジアのデザイン文化の比較研究

山車の造形と祭礼文化を中心にして(2)

COMPARATIVE STUDY OF DESIGN CULTURE IN ASIA Focusing on the forms of mountain floats and festival cultures (2)

今村 文彦	基礎教育センター 教授
杉浦 康平	アジアデザイン研究所 所長
齊木 崇人	デザイン学部環境・建築デザイン学科 教授
大田 尚作	デザイン学部プロダクトデザイン学科 教授
松本 美保子	名誉教授
山之内 誠	デザイン学部環境・建築デザイン学科 准教授
黄 國賓	デザイン学部ビジュアルデザイン学科 准教授
佐久間 華	大学院芸術工学研究科 助手
曾和 英子	デザイン学部プロダクトデザイン学科 非常勤講師

Fumihiko IMAMURA	Center for Liberal Arts, Professor
Kohei SUGIURA	Research Institute of Asian Design, Director
Takahito SAIKI	Department of Environmental Design, School of Design, Professor
Syosaku OTA	Department of Product Design, School of Design, Professor
Mihoko MATSUMOTO	Honorary Professor
Makoto YAMANOUCI	Department of Environmental Design, School of Design, Associate Professor
Kuo-pin HUANG	Department of Visual Design, School of Design, Associate Professor
Hana SAKUMA	Graduate School of Arts and Design, Assistant
Eiko SOWA	Department of Product Design, School of Design, Lecturer

要旨

本報告は、アジアデザイン研究所の活動としてアジアの山車文化についてデザインの視点から調査、研究を進めるものである。研究所では開設以来、アジア各地域でみられる祭礼の多様な山車の造形的特徴、象徴性、世界観、その仕組みと社会や環境との関係性などについて、継続的に取り組んできた。

本年度は、開催を予定していた国際シンポジウムを都合でとりやめ、そのための準備などを中心に活動を行なった。アジアの舟形の山車についてその造形的な特徴として鳥や龍(蛇)などが多用されるが、そのための研究会を開催した。またタイ南部のチャプクラ祭の現地調査を実施し、ナーガ(蛇)のモチーフで飾られた舟形山車、ミャンマーのインレー湖でのパウンドーウー祭にでる伝説の鳥「カラウェイ」を模した鳥形の黄金船など現地での取材も実施した。また、国内の太鼓台調査(岡山県倉敷市乙島の千歳楽)、中国浙江省前童鎮の鼓亭調査も継続して行ない、さらに理解を深めた。

これらの一連の活動により、アジアのデザインについていくつかの重要な知見を得ることができた。

これらの成果をもとにさらに継続的な調査を続け、社会構造、空間構造とも関連づけて、総体的に祭礼の仕組みと山車の造形を把握していく予定である。

Summary

This report deals with the main research theme of Research Institute of Asian Design (RIAD), focusing the cultures of mountain floats in Asia from design-centered approach. We want to make clear design technique (language) of mountain floats from their wide variety of forms, symbolic meanings, cosmology and their relationship of society and natural environments.

We made some preparations for 2nd international symposium, because the symposium was postponed next year. We could find frequently characteristic motifs of sacred bird and dragon (or snake) in mountain floats of Asia. So, overseas researches are made at southern region of Thailand and central district of Myanmar in order to certificate the symbolic meanings and structures of float.

We had also investigations of new year festival in Qiantong, Ninbo city, China and *Senzairaku* in Okayama Prefecture, which is another type of mountain floats in Japan.

RIAD got very useful insights from these activities and research for deep understanding about design cultures of Asia.

○研究目的

本研究は、アジアの山車文化についてデザインの視点から調査、研究を進めるものである。アジア各地域で見られる祭礼の多様な山車の造形的特徴、象徴性、世界観、その仕組みと社会や環境との関係性などについて、現地調査、比較研究を通じて総合的に検討し、その全体像、デザイン手法（語法）を明らかにすることを目的としている。これらを通して、さまざまな山車の形態、造形、地域的固有性の背後にある基底的共通性に着目し、アジアのデザインにおける文化的特徴、独自性を追求し、把握することを目指している。

本研究は 2011 年度から引き続いてアジアの山車文化に焦点をあて、国際シンポジウムを開催するための準備を中心に調査研究を展開した。当初、2012 年度にシンポジウム開催を予定していたが、発表予定の海外研究者の人選が難航したり、日程調整の問題があったことから次年度に開催を変更し、シンポジウムテーマに関する研究会活動を中心におこなった。以下にその概要を記す。

○国際シンポジウム開催のための活動

(1) 研究会：インド神話におけるガルダ【霊鳥】とナーガ【龍蛇】—拮抗しあい、相補う両義的神性

次回に予定しているシンポジウムは舟形山車の象徴性、造形性を検討する予定であるが、そこに登場するミャンマー、タイの舟形山車は、同じ上座部仏教の祭礼でありながら、一方は鳥舟に、他方は龍舟に仏像を載せて巡行する。その理由を知るため、インドの宗教（ヒンドゥー教）および民俗芸能研究の第一人者である小西正捷氏（立教大学名誉教授）を招き、霊鳥ガルダと龍蛇神ナーガが、ヒンドゥー神話においてどのように位置づけられ、関連しているかについて、豊富な図版をもとに解説していただいた。

インド世界では、霊鳥ガルダはヴィシュヌ神の乗り物であり、太陽神を乗せる馬車のように天界を経巡る、金の翅をもった「金翅鳥」である一方、暗黒の地中に棲み、雨を司る蛇、ナーガをついばむ恐ろしい力

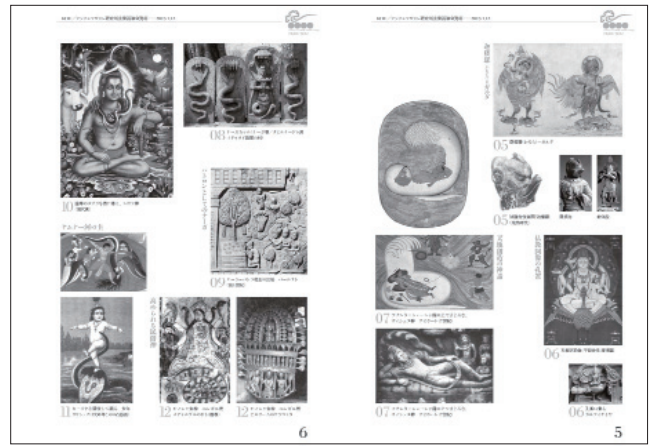


図1 配布資料

をもつ存在でもある。他方、仏典などでしばしば「龍」と称されるナーガは、西洋の龍や東洋の龍とは異なり、善悪の両面を持った恐ろしいコブラである。コブラは世界を滅ぼす力を持つが、同時に世界を滅びから救い、創造する存在でもある。

ヒンドゥー世界では、絶対悪や絶対善はなく、善も悪も同じものの両側面であるとされる。ガルダとナーガは、一見して光一闇、善一悪、天上一地下、太陽一雨を司る存在と捉えられがちであるが、両者は激しく厳しく相対しつつも、双方が補完しあう対になって初めて世界が完結し、永続させているのである（図1）。

(2) タイ南部スラタニーにおけるチャクプラ祭の調査

2012年10月28日～11月2日に国際シンポジウムの予備調査として、タイ・スラタニーにおけるチャクプラ祭の調査を現地タイ・マヒドン大学の浦崎雅代氏、Hom Phrom-on氏の協力を得て、実施した。（調査者：黄国賓）

チャクプラ祭は、タイ上座部仏教で四旬節の終わり（太陰暦の11

月1日）にあたる雨安居に仏像を舟形の山車に乗せて町中を曳き歩いたり、海上を渡御する祭



写真1 チャクプラ祭に曳きだされる舟山車



写真2 町を曳行する山車

礼で、タイ南部で多くみられる。舟形の山車は木で作られ、その先端に数多くの

派手なナーガの装飾が施される。船の周りには鮮やかな色の布、旗、バナナツリー、さとうきび、ココナツの枝、花などを飾る。船上にはドラムや鐘を置いたりして、中心部に須弥山をかたどった台座に仏像が載せられる。

ナーガは天と地を繋ぐものとされ、仏陀が悟りを開き地上に下りてくる時の乗り物だといわれる。また、地獄のものや生きとし生けるものすべてにとって、安居明けは世界が開けた象徴である。また、タイ南部はこの時期田植えが始まる雨季であることから、仏陀とともに下りてくる水の神ナーガが水をもたらしてくれると信じられている。このため、ナーガを飾ると説明される。

(3) ミャンマー中部インレー湖におけるパウンドーウー祭祀の調査



写真3 カラウェイ船(ミャンマー)



写真4 カラウェイ船に随伴する立漕ぎ船

ミャンマーについては当初研究所員が現地調査を予定していたが、情勢が不安定で短期間の調査が困難であることが予想された。しかし、幸いなことに日本国内にミャンマー人留学生(ゼイヤー・ウィ

ン氏)が対象となる祭礼を調査していることが判明し、現地での調査を依頼することになった。

インレー湖はミャンマー中部にあり、南北に22km 東西12kmと細長い。水深が浅いため周辺に住むインダー族などが水上に家屋を設けて住んでいる。湖畔にあるパウンドーウーパゴダ(寺院)に祀られている4体の仏像が、伝説の鳥「カラウェイ」を模した鳥形の黄金船に乗せられ(写真3、4)、湖周辺の各村を巡って行く祭りが行なわれる。調査は、2012年10月18日から11月3日までの間、実際にカラウェイ船の巡回ルートに従って一緒に移動しながら近隣の水上村に滞在して、撮影もあわせて行なわれた。モーターボートをチャーターしてカラウェイ船の巡回ルートに先回りしながら撮影をしたり、時には祭祀運営責任者の協力を得て、カラウェイの上から参拝客や移動中の水上集落の風景などを撮影することもできた。パウンドーウー祭の歴史や儀式などに関しては、祭りの継承者や集落の長老たちから聞き取り、自らがカラウェイ船創作に関わった経験を持つ水上村の画家の協力を得て、カラウェイ船のデザインなどの資料を入手できた。

○国内祭礼調査－岡山県倉敷市玉島乙島の千歳楽

瀬戸内海の沿岸部に比較的多く分布する太鼓台については、四国側の新居浜や観音寺が注目されることが多いが、本州側の岡山県南地域にも多様な造形の太鼓台や山車が数多くみられる。

その代表的なものが「千歳楽(せんざいらく)」である。千歳楽は、四国の太鼓台と同じ系統に属するが、重さ



写真5 千歳楽



写真6 御船

も約1トンほどで、装飾も派手ではない。しかし、小型であることが、逆に独特の動きや振る舞いなど固有の展開をみせている。この地域でもっとも大きな祭礼である倉敷市玉島乙島の戸島神社の祭礼について、2012年10月28日に調査を実施した。（調査者：今村文彦）

戸島神社の祭礼には、9台の千歳楽と3隻の御船（おふね）、獅子舞を奉納する1台のだんじりが奉納されるが、これらを総称して大場物（おおばもの）と称し、各地区の青年団が運営する。祭礼は10月28日の早朝に始まり、1日をかけて旧島内を一巡する。順路はもっとも狭いところで1メートルほどしかなく、千歳楽の大きさもこれに規制される。千歳楽は、上部にある四隅のしめ縄（結び）の端が特徴的にはねあげられている（写真5）。また御舟と呼ばれる舟形の山車は北前船を模し、太鼓台と同様、内部に太鼓が据え置かれている。3艘の御船が揃って境内で練ることを「三艘船」と呼び、特別視されているが、乙島が海上交通と深く関わってきたことを表わしている（写真6）。

これらの大場物は、宮入り後の神社境内での練りあわせでは、その機動性が生かされ、軽快に動き回り、海のうえを帆走しているようにもみえる。海や海上交通との結びつきが随所に見られる祭礼である。

○中国浙江省前童鎮元宵節の鼓亭、抬閣の調査

中国浙江省前童鎮の調査は、2011年度から継続して実施している。実際の祭りの参与観察に加え、2012



写真7 継楽亭（前童鎮）



写真8 鼓亭（黄壇鎮）

年の8月には、鼓亭、抬閣、秋千と親族組織（房族）の関係について聞き取り調査を行ない、鼓亭会館で実測し、装飾や来歴についても資料をえた（写真7）。

2日間にわたる元宵節の巡行は、町の歴史と結びついており、その起源と現代的展開を確認するものとなっている。隊列は古鎮のなかを巡回した後、今の町並みや水利を整備した開発祖先を祀る塔山廟でその「濠老爺」の人形を載せた御輿を加え、さらに関係する枝村を回ってから、近年に開発された住宅街を巡るのである。鼓亭、抬閣、秋千の隊列の順番もくじで決められるが、「公忠亭」という鼓亭だけは毎年変わらず列の先頭に立てられる。公忠亭は、鼓亭の首位という意味で「頭牌」とも呼ばれ、系譜のうえで比較的早く分岐した房族が奉納するのである。

また、2013年2月には前童村にほど近い黄壇鎮の元宵節を調査した。ここでも、比較的小さいながらも鼓亭や抬閣の巡行が行われている（写真8）。浙江省の他の地域にも鼓亭が存在するという情報もあり、今後は地域を広げてさらに展開することが必要となる。

○小研究会の開催

これらの活動とは別に、研究所メンバーの研究活動を報告する小研究会も行なった。「空間構成と民族芸術からみた福建地方の伝統的商家住宅の特性に関する研究」（山之内誠）、「台湾原住民の語彙と織物にみられる色彩文化発達について」（曾和英子）、「小袖と立木模様の研究報告」（佐久間華）などのさまざまなテーマで議論をかわし、アジアのデザインについての理解を深めた。

これらの活動をもとに海外および国内での調査を始めとして、研究成果を整理、検討していく。さらに日本を含めたアジア各地との比較研究によって、アジアの山車の構成原理、コスモロジー、自然観などとのつながり、山車を含めた各地の祭礼の果たす社会的役割を見直し、地域的伝統の再生と再創造へのデザイン的方法論の開発を目指す。